

「特攻隊」志願者の共感

シールズ行動

元海軍飛行予科練習生（予科練生）の加藤敦美さん（88）。安保法制＝戦争法に反対したSEA LDs（シールズ）の若

憲法施行70年
先...る

第1部 9条は生きている

③



者たちのデモをテレビで見て、「今のあなたの方のようにこそ、我々は生きていたかった」とメールを送る投書が2015年7月、「朝日」に掲載されました。

シールズの奥田愛基さん

世代を超えて憲法9条

の精神が響きあっています。

戦争法を強行し、日本を「戦争する国」にしよ

うとする安倍晋三政権に、加藤さんは「首相が号令をかければ、自衛隊員は死を覚悟しないとい

美化された死

加藤さんは1928年、旧「満州」（中国東北）の大連で生まれ、44

元予科練生の加藤敦美さん
終戦の日の前日に国会前で戦争法案に反対するシールズの若者たち（中央が奥田さん）2015年8月14日

年に16歳で予科練生に合格。徴兵される前に命をささげる「忠義」が美しいと考へ、「特攻隊」への道を志願しました。幼少期からの教育で「天皇のために死ぬ。そのためにわれわれはいる。天皇の名で命令するものには絶対に従うようになってい

ました」。今では、自分の「生」を守ることさえ考えられない戦争への怒りを語ります。

命守るために

「今が戦争の始まりではないかという不安があります」と語る元シールズメンバーの諏訪原健さん（筑波大学大学院生）は、加藤さんのメールを同じ元予科練生の祖父の

加藤さんは戦争法に反対する若者たちの姿に「憲法9条の平和の中で生まれ育って、生きているのが当たり前という学生たちが、今その命に影が差していると感じたので、そこをデモをやったのでしよう」と述べます。

諏訪原さんは安倍政権が進める「戦争する国づくり」に対して、「主権者として考えることは大事です。『関係ない』という意見はありません。しかし、そういう無関心の集積が最終的にどうなったかは、歴史的に考えると

加藤さんは、旧「満州」での生活や予科練生の経験の反省から、一人ひとりの命を守る憲法9条の大切さを強調。「9条がなかったら戦前のように殺される。自分が生きていけるのは憲法9条を頼りにしているからです」と言い切ります。

(つづ)